

富士に祈る 60

信仰と伝承 — 岡野聖憲・その14 —

國學院大學兼任講師 城崎 陽子



大祭を迎えた御霊地(埼玉県北本市)

先回は、聖憲が醍醐派分教会の認可を得て、北本宿に大日如来を祀り、さらには「八角供養塔」の形を取り入れた天茶供養の形式を整えたり、萬部供養を行うなど布教活動を進めると同時に、教義をわかりやすく説いていったことまでを記した。今回は、日本の国と大陸の国々との政治的關係が急を告げるなか、宗教統制が厳しくなり、聖憲が天津教からの離脱を決定するところまでを記す。

昭和十年(一九三五)は御霊地の新年初詣りで始まった。朝まだ明けやらぬ天神地祇一神宮の前では、兄・新三郎がたき火をし、甘酒を振舞うといった様子であった。六番地でも会員の年始挨拶が列をなすほどであった。そして、二月に入ったころ、六番地を訪れたある支部長が「支部報」の刊行を持ちかけてきた。解脫会の活動が盛んになり、地方へと伸びている現在、聖憲と支部、さらには、

地方の会員とを、どのような問題になっていくかが大きな問題になってきたからである。聖憲は「支部報」といわず、会の「月報」を出すことを勧め、さらに、その誌上に「巻頭言」として聖憲自ら教義の解説を記すことを計画した。月報『解脫教』第一号(昭和十年二月十八日刊行)はこうして発刊された。表紙を飾る「解脫教」の題字と一ページ目の「神意同仁」の墨書は会長自らの揮毫であった。そして、「巻頭言」は「五法則」を載せたのであった。ちなみに、「解脫教」は昭和二十年三月、戦争による紙不足のために中断するまで続けられた。そして、終戦後の昭和二十四年八月に復刊し、二十九年に雑誌形態となり、現在の『解脫』へと続いている。

三月に入ると、聖憲は先年に購入した御霊地の改修工事に取り掛かった。今回の改修は、五月の大祭にむけて、一面に生えた篠竹を取り払い、植林をし、新たな参道を付けることを目的としていた。周囲に植える草や木は、春に花をつけ、初夏に新緑を茂らせ、秋には美しく紅葉する、そのような林間を目指して植えつけられた。そして迎えた大祭の日に、聖憲は「自己認識、自己反省、自己没却」の教えを簡明に説いたのである。この三つの要点は、「自己」が本来の姿となつてゆく道筋を前提として、祖先と自己との関わり、社会と自己との関わりに目覚めていく段階を追って説明される事柄である。即ち、無限の先祖を頂く自分は善悪を問わず、様々な肉体的・精神的遺産を授かって存在しているのであって、その内の罪業(悪しき精神伝統)は生活苦や病苦などとなって現れる。これを「お詫び」によって清算し、罪業を一掃することが解脫の第一歩である。一方、受けている無限の恩恵に対して感謝

し、報恩の行として、善き社会を造ることが大神御心の使命でもあると説く。そして、それにはまず、一家を正しき道に歩ませ、これを一村、町、郡、県、国へと拡大していくことで、「美祿の御世」「人生の棲よき国家」を成すことができるというのである。

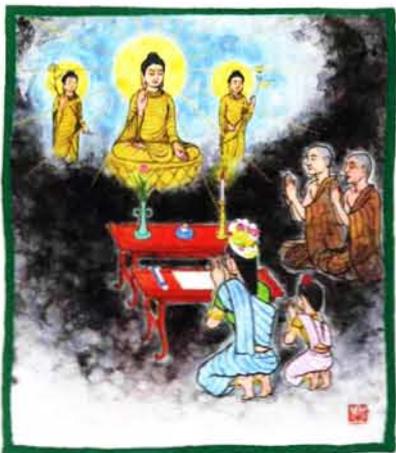
さて、解脫会の活動が軌道に乗り、地方への布教が進んでいくにつれ、聖憲も地方へ出かけることが多くなった。一方、日本全体の社会状況は風雲急を告げていたのである。昭和六年(一九三一)には満州事変が勃発、翌七年(一九三二)には満州国建国が宣言され、昭和八年(一九三三)には国際連盟を脱退している。そうした社会状況の中で昭和十年(一九三五)十二月八日に、新宗教の中では最も大きな勢力を保っていた大本教が不敬罪および治安維持法違反の嫌疑によって大弾圧を受けたのである。

大本教は明治二十五年(一八九二)京都府綾部で出口ナオが神懸りして開いたとされる神道系の新宗教教団である。「良の金神」による「世の立替え、立直し」を訴え、「みろくの世」の到来を説いた。大本教が大きな勢力を保つようになったのは、明治三十三年(一九〇〇)に女婿・出口王仁三郎を迎えてからのことだ。「病氣治し」「予言」「集団的神懸り修行」といった行為によって、全国に勢力を伸ばした。大正五年(一九一六)に「皇道大本」と名称を改めた後、「神政実現」を呼びかけて政治色を強めたことから、知識人や軍人の入信が増え、そのことで危険視され、大正十年(一九二二)に一度弾圧を受けている。この弾圧後、人類愛善会として復活を果たしたが、天皇制と相いれない異端的な教義の根本と、昭和九年(一九三三)に結成した政治団体「昭和神聖会」の活動等

が当局の取り締まり対象となり、先に述べた大弾圧につながったのである。千名以上の信者が取り調べを受け、三十名が検挙された。大本教の本部はダイナマイトで爆破され、大本教の勢力も、この時大きくそがれてしまったのである。また、同じ月の十六日には天理教本部が脱税容疑で捜査を受けた。こうした宗教統制の厳しさは、天津教に対しても向けられていたから、聖憲はこの段階で天津教から離れ、醍醐派解脫分教会としての立ち位置を堅持することを決めたのである。



祈ることの心の底にある帰依



絵・橋本豊治

釋尊の御心は 25 句・菅谷秀文

帰依とは、サンスクリット語のシャラナ(庇護を求めること、避難所)で、優れたものを信じて全てを委ねることをいう。

仏教徒となる第一歩としての誓いの帰依三宝

帰依仏(仏に帰依すること)

帰依法(仏法に帰依すること)

帰依僧(僧に帰依すること)

また、華嚴経から採られた句である三帰礼文もまた、帰依三宝を唱えるものである。